

序論

8月8日・9日に渡って行われた東京大学見学会・企業大学訪問に参加した。行動計画は非常に密な内容に組まれていて忙しく大変だったが、おかげで本当に数多くの貴重な経験を得ることができた。それらを語ろうと思えば時間を忘れて話し続けることができると思う。それほど自分が今回の旅で学んだことが多かったということだ。ここではこの2日間の感想として主に2つのことについて以下に記そうと思う。

企業訪問

私は今回の企業訪問で隈研吾都市設計事務所を訪れた。この事務所は港区南青山にあり、周りを見渡せば、有名な建築家が設計した建物がいくつも目に飛び込んでくるような場所だ。私が隈研吾設計事務所を訪れたいと考えた理由は隈研吾さんの作品は木材を使った和の建築が特徴的であると知ったからである。現代ではガラスやコンクリートを用いて利便性や合理性を重視した建築がなされているものが多く建てられている。私個人の考えだが、住みやすい環境を作り出すことだけでなく、地域の特色や風情を生かした建築をすることが重要であると思う。この点において日本では、環境の条件を優先することによって、自国の象徴ともいえる和の町並みが壊されてしまっているように思える。その中で、日本ならではの和の建築と現代人が求める環境の実現を合成した設計を施すことが必要であると考えた。企業訪問のアポイントメントは自分たちで取るというかたちだったため、そんな建築を数多くの作品で実現させてきた隈研吾さんの設計事務所に行けることが決まった時はとても興奮した。

事務所はいくつかのビルのフロアに別れてあった。初めに、スタッフの方々が各オフィスで仕事に打ち込んでいる様子を見せていただいた。驚いたのは、日本人よりも多いのではないかとはいくらかの外国人スタッフが働いていたことだ。見た感じだが、様々な国の人が協同で働いていることがわかった。だから、オフィスのあちらこちらで英語の会話が飛び交っていた。案内をしてくださったスタッフさんも英語は話せたほうがいと話していた。この事務所では国外の担当で海外に飛ばされることが多いらしい。皆さん真剣な表情でパソコンに向かっていたので、常に緊張した空気が流れていたが、明るくジェスチャーで私たちを歓迎してくださった外国のスタッフさんに会った時は緊張がほぐれた。数々の小さな模型は、見ているだけで楽しかったし、ずっと覗いていたかった。

オフィス見学の後、事務所の方がいくつかの質問に答えてくださった。設計するにあたって、安全性を重視し過ぎてしまうと独創性が損なわれた設計になってしまうのではないかという疑問を持った私はその安全性と独創性のバランスの取り方について質問してみた。すると次のような返答が返ってきた。「安全性と独創性は対立する関係ではない。安全性が設計において1番の絶対条件であり、それを充分考慮した上で初めて独創性が生まれる。」

なるほど、自分は最も重要な部分が欠けていたようだ。またここで1つ大事なことを学んだ。ならば独創性を広げて行く上で制限はあるのだろうか。どこまで設計する側は考えなければならないのか。これについても聞いてみた。やはり経済面での制限は大きいという。限られた予算によって自分のもとのイメージが削られてしまうことはよくあることだが、それは非常に悔しいことだと話していた。経済面だけでなく、依頼者の要望も最大限受け入れ、設計に生かさないといけないから、やはり大変な仕事なのだと改めて感じる事が出来た。

東京大学見学

気温 35 度を超える暑さの中、見学は始まった。駒場、本郷、弥生キャンパスの主に3つのキャンパスを見て歩いた。FairWind という地方高校生の進学支援を目指す東京大学所属の学生団体の方々に案内していただいた。

駒場地区キャンパスは東京大学に入学した学生全員が前期過程の2年間を過ごす場所だ。このキャンパスの見学で1番印象深かったのは、駒場図書館見学である。この図書館には約65万冊の蔵書と1,100席の閲覧席が用意されている。東京大学には本郷地区キャンパスにある総合図書館、柏地区キャンパスにある柏図書館、各学部や研究所等にある32の部局図書館そしてこの駒場図書館という複数の図書館が存在していて、総称「東京大学附属図書館」と呼ばれている。この附属図書館全体の蔵書数は約958万冊にも上る。この資料の豊富さは、現役東大生や東大のOB・OGの方々が口を揃えて語る東大の魅力の1つである。他の図書館では手に入らない貴重な資料が、必要なときにすぐに手に入る環境に置かれていることはとてもありがたいと話していた。駒場図書館の閲覧席は自習用としての使用もされていて、試験期間に関係なく普段から学生が足を運び学習しているそうだ。緑が広がるキャンパス内は、大都会である東京の雰囲気とは一変した静かなときが流れていた。落ち着いて学習ができるのはもちろんのこと、心が癒される場所のようにも感じた。私はこんな場所で学生生活をおくってみたいと思うとともに、これらの設備は東大生の学びを支える力強い味方となってきていると感じた。

図書館見学の後、「進路を見つめ直す」という題でワークショップが開かれた。私は2人の東大生のプレゼンテーションを聴くことができた。話してくれた2人は、進路を選択することにおいてそれぞれ少し異なる考え方を持っていた。これらを参考にしてほしい例として私たち高校生に話してくれたのだと思う。

1人目の方は将来から逆算して進路選択をしたという。はじめに大きな夢や目標を描きそれらを達成するために何が重要かというポイントをいくつか絞って考えたそうだ。例えば、周囲の人材や費用問題、研究環境など様々なことに視点を向け、それらの観点から大学選びをしたという。それで最終的に東京大学にたどり着いたということだ。「なるほど、自分なりに求める観点を絞ってから考えれば大学だって絞りやすい。」そう私は感心した。

私は大学の大きな特徴だけを理解しただけで、大学の良し悪しを決めてしまっていたのだ。しかし私は現時点では大きな夢や目標を持っていない。いずれは自分も明確なものが見つかるだろうと信じているが、今はそこまで至っていないのだ。私に将来から逆算して進路選択を進めて行くという方法は不可能だ、そう思い少し気を落とした。

そんなことを考えているうちに 2 人目のプレゼンテーションがはじまった。その方は、はっきりと夢や目標を持つことが難しかったため、何となく将来のイメージを描くことから進路選択を進めたという。少しずつ「では、具体的に大学で何がしたいのか」ということを考えていき、動機づけをしていったそうだ。1つのかたちや姿に近づくために大学を選ぶのではなく、「様々な分野において学習し、将来の選択肢を広げ、その後で将来の明確なかたちをつくろう」という考え方だった。確かに大学に入って大学生活おくらしているけど、将来の夢や目標はまだ決まっていないという学生は多いと聞いたことがある。「そういうことって焦って決めても、いつれ何かがきっかけで、また違った新しいものが見つかるかもしれない。ならば無理して今から決めなくてもいいのではないか」私は以前から進路選択においてこのように考えていた。でも周りには既になりたいものが決まっている友達が多いため、このままでいいのか不安だった。だから私は 2 人目のプレゼンテーションを聞いて背中を押されたような気がした。

結論

ここで述べたこと以外にも、ディレクトフォース夏季プロジェクト、東京大学での模擬授業、研究室見学など多くの経験を得ることが出来た。普段は滅多に行くことの出来ない場所に足を運んだことは、慣れない環境への対応の訓練にもなったし、社会勉強の良い機会となった。この東京研修で得た経験は、いつまでも大切に心にとめておき、進路選択だけでなく今後の人生に活かしていきたい。